

# 研究通信

No. 155

1989年1月15日 刊  
村落社会研究會局  
事務部 学商部  
中央大学 四郎  
吉沢 野742-1  
八王子市東中野  
Tel 0426-74-3559

## 第三十六回大会印象記

立川 雅司

あの「大井町」で村研が開催されるという。大井町とはどんな所かという関心も手伝って村研に参加した。しかし新松田駅と会場との間を往復する車窓から僅かに窺えた大井町は、断片的な情景ながら、まさに「断片」としか表現できないような全く異なった点景として脳裏に焼き付いている。第一生命本社社屋、駅前商店街、東名高速、林間に点在する農家、いずれもまさに「断片」的に印象づけられるものであった。

さて第三十六回大会は、「農村社会編成の論理と展開―転換期における家と村落―」という共通課題のもとで四つの課題報告と五つの自由報告がなされた。主に課題報告について述べることにする。

最初の課題報告。柿崎京一氏は、「聚楽的家関係と村落の編成」において、さきに関西・東海地区研究会において山本正和氏が提起した問題関心、即ち「経済的条件以外の家を支えていくようなある種

の価値・文化構造があるのではないか」という提起にまず触れ、これを「家の信用」の観点から据え、村落の編成を考える上での手がかりとしている。村を構成する単位としての家は、それ自体として単独に存立するのではなく、家と家との「関係」(インフォーマルかつ非定型的関係)がむしろ家をして家たらしめていると考えてはどうか。「信用」は、この家と家との関係が表現されたものと考えられ、村を支える基底的な関係として据えられる、とされた。この点は、関係の自立性(関係自体の物質的基盤は問わない)を前提とした家・村把握を示唆しているものとして筆者には大変興味深かった。これは「村落の意味・文化論」とも切り結ぶことができる問題として重要であると思う。

課題報告の第二。後藤・光吉・三上・山本・清水氏らは、「農漁村における家の変容―比較分析―」において、産業・社会構造を異にする農村と漁村における家(家族)について、生活構造論的アプローチから用意した分析枠組みに基づいて比較分析を試みた。即ち、家族の構造ないし変動を、「家族規範」と「生活状況」の両面から明ら

かにしようという意図のもとに最初に枠組みが提示されたが、これは「親族論」対「生活論」というこれまでの家に対する2つのパースペクティブを基本的に生かそうとする試みと言えよう。そこで以下、豊富な資料を提示しながら、家族構成・家の連続性意識・家長権・役割分担等内部構造・親族組織について農・漁村の比較分析がなされたが、正直なところは私には充分消化できず、現時点での相違はともかく、各々の生活状況の変化の下で家がいかに「変容」したのかについては充分理解が行き届かなかった。

課題報告の第三は、井上和衛氏による「農家就業構造の多様化と農業労働組織の解体・再編」。氏は、現代の水田地帯における農家就業構造の特徴を兼業化・多就業化・高齢化としてまず押さえ、機械化・地域労働市場の展開と共に稲作労働力の編成が大きく変貌してきたことを事例を紹介しながら論じた。それは基本的には、夫婦労働力が就農できる家族経営が解体し大規模借地型稲作協業経営が展開するという形で据えることができるが、現在、労働力の再生産の点において不安定な要素を抱え込んでおり、今後の課題として、家を離れた単位で労働力調整をしながら、しかも家族労働力の性格を生かす方法が求められるとしている。農業労働力を「労働主体とは何か？」という観点から問い直す問題提起には、これまでの就業構造分析が忘れかけていたものを喚起する視点があり、共感を覚える。

最後の課題報告は、大川健嗣氏の「過疎・出稼ぎ地における家と村落」。山形県西川町及び真室川町における集落調査をふまえ、最劣等地的農業生産点である東北過疎山村が今日抱える現状と展開を論じた。西川町が、世帯数の減少と「潜在的離村志向農家」の存在から見て西日本における挙家離村型過疎に接近しつつあるのに対して、

真室川町は、町内の地域開発を進めてきたことにより、人口減少率が相対的に低く、跡継ぎ層のUターンも得て家としての再生産は確保される見通しである。ここから氏は、インフラの整備と地域作りとをいかに結び付けて行くかが地域政策として必要で、地域企業の誘致についても単なるアセンブリ部分ではなく、一部でもR&D部門を持つことが海外への資本トランスファが進む中において重要であると論じた。

報告終了後、共同討議に移った。まず、司会者から「転換期における家と村落」という共通課題に関連して「転換期とは何か」について報告者各氏に補足的に意見を求める形で討議が開始されたが、討議の焦点は今日における家の問題に集中して行った。

柿崎氏は家を生産をも含む生活体、いわば柔軟な「アメーバ的構造」をもった生活組織として捉える。生産面から家を見ると家自体が担い手であるという構造は既に失ってしまっており、家の内的編成も変化している。この家の内的編成の変化が、家関係の変化に対していかに反映するのかを今後問う必要がある、とした。これに対して、光吉氏は家を家族という文脈で押さえ、家族を親族関係を基礎とした生活体と捉えた。ここでは、家は居住規則等を個人に課す規範と見なされている。さらに家を家業・家産との関わりを抜きにしては語ることができないとして労働組織の面から捉えることに提起したのは安孫子氏である。その後の討議は家をいかに捉えるかに関わって展開された。議論は、家を「歴史的構成体」と見るか「文化的連続体」と見るか、或は実体的に据えるか規範的に捉えるか、さらには労働組織と把握するか生活組織と把握するか等、様々な立場を包含しながらかなり焦点を絞った討議が行われた。最終的に一つ

の共通認識には到らなかったとはいえ、家をめぐる多岐にわたる議論は、かえって家の問題が尽きることのない肥沃な研究領野であり続けているという証明ではなからうか。

家についても村についても大きな転換期にあること、このことについてはだれしも認める所ながら、共通認識に到るには程遠い、そのことも同様明らかである。本質規定を行うことを全く否定することに賛成はできないが、各研究者が各々の規定を行う営みの中で、当該の規定によって何が見えてくるのか或は何が見えなくなるかについての議論を相互に尽くして行く中で、やはり最終的には各研究者の戦略的な研究上の立場から操作的に規定を行っていくことが必要であろう。

自由報告については、以下簡単にしか触れることができない。有馬洋太郎・荒樋豊氏らの「村落社会の変容と戦後のコミュニティ活動」は、生活環境・資源の問題について、所有をこえた村ぐるみによる地域管理をめざす実践活動を述べた示唆に富む報告であった。

霞理恵子氏は、「ムラを支える諸要因の分析」において沓岐のムラを解体から支えたものとしてその柔軟な農業経営のあり方と社会的な価値観について考察した。玉井康之氏の「北海道十勝農村における集落組織再編と集落自治の形成」は、二つの集落再編事例の比較分析を行いつつ、情報伝達機能に注目して集落再編の現段階的意義と課題を明らかにした。相川良彦氏は、「現代農民女性の信条と家族観」において、農家女性の記録作品の分析を通じて、女性における「家」意識の醸成過程を日常的な経済生活・家族関係の営み（特に苦難への対処）の中から探り出している。最後に浅野慎一氏の「N. E. レーニンのロシアにおける出稼ぎ農民把握の論理」は、氏のこ

れまでの実証研究をふまえて、出稼ぎ農民をより広い世界的な視野から捉え直すための理論的作業の一環と位置づけられる報告である。ここでの視点は、出稼ぎ農民が出稼ぎ経験を通じて、自己を内面的に変化させつつ農民社会に対しても変動要因を持ち込むという点に置かれている。分析枠組みについては、社会移動が結果する移動効果論としても興味深かった。

